

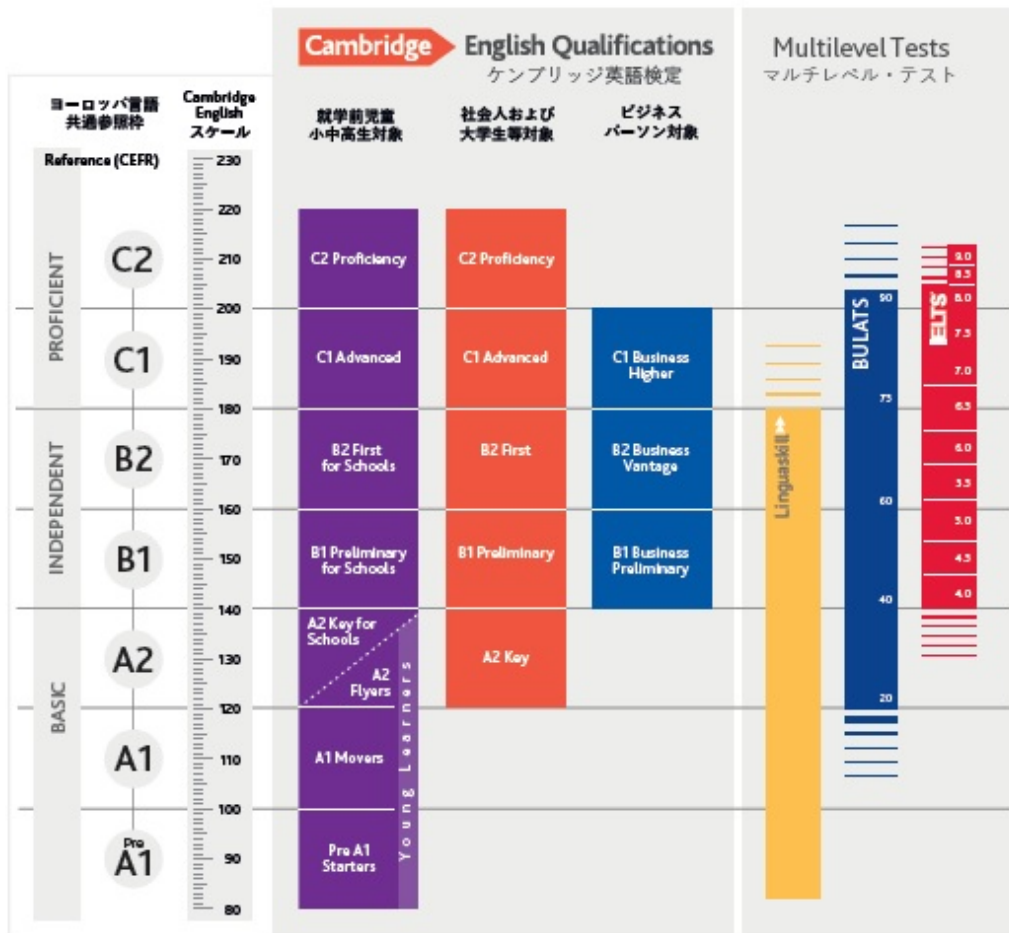


ケンブリッジ英語検定と CEFR

欧州評議会のヨーロッパ共通参照枠(CEFR; 欧州評議会、2001)は、能力記述をとりまとめた一連のもので、どの言語にも適用することができます。能力記述子(descriptors)は、言語学習の中で明確な到達目標を設定し、言語の熟達度レベルの定義づけに役立つほか、その言語資格がどのようなものであるか解釈するために活用できます。CEFR は今や、言語能力をベンチマークする1つの方法として世界で広く受け入れられており、言語・教育政策において中心的な役割を果たしています。

ケンブリッジ大学英語検定機構は、何十年にもわたる CEFR の発展に貢献したという唯一無二の立場にあり、私たちはそれを更に発展させるべく、『イングリッシュ・プロファイル』(詳細は後述)等の研究プロジェクトを通じて、引き続き開発に携わっています。ケンブリッジ英語検定は CEFR を具現化した試験であり、CEFR は部分的にはありませんが、ケンブリッジ英語検定をベースに設計されました。ケンブリッジ英語検定は 50 年以上にわたり CEFR に関与してきましたが、弊機関ほど深く、また広く関わっている試験機関は他になく、今後も引き続き CEFR の研究に関わって行く所存です。

同レポートでは、いかにしてケンブリッジ英語検定が CEFR と共に開発され、歴史的に CEFR にマッピングされていると主張できる唯一の英語の語学試験であるといえるのか、また数十年にわたる実証的研究を通じてつながりが整えられていったかについて、説明させていただきます。



まず、ケンブリッジ英語検定¹とCEFRの関係に焦点を当ててみましょう。ケンブリッジ英語検定は数ある私たちの試験の根底を支える試験であり、中には弊機関が開発した試験の中で最も長く続いている、2013年に100周年を迎えたプロフィシエンシー(C2 Proficiency)も含まれます。ケンブリッジ大学英語検定機構はCEFRにその開発初期から関与しており、弊機関が開発した試験は全てCEFRのレベルにそって現在、上図のように整えられています。

ケンブリッジ英語検定がCEFRを具現化、あるいは反映していることを示す多くの証拠がありますが、**ケンブリッジ英語検定とCEFRとの関係について、以下の4つの観点から説明することが可能です。**

歴史的観点 CEFR – the historical perspective

CEFRは、『現代語プロジェクト』の一環として欧州評議会が助成した1970年代初めの研究に遡ります。同プロジェクトでは、言語教授のための学習目標を記述することを通じて「Waystage」レベルおよび「Threshold」レベルを開発しました。この2つのレベルは、比較的低い熟達度レベルにあって、達成可能かつ意味ある言語能力レベルになるよう、また、成人の言語学習にとって欧州単位制(European unit/credit system)の一部を形成するために設計されました。

1980年代後半に入って、ケンブリッジ大学英語検定機構は専門機関としての支援と、WaystageとThresholdレベル改訂のため、財政的な支援を提供しました。(Van Ek and Trim 1998a, 1998b) 改訂されたレベル記述文は1980年半ばに改訂されたB1 Preliminary試験や1990年初めに新しく導入されたA2 Key試験のテスト仕様書の中核を為すものでした。1990年に「Waystage」「Threshold」に次ぐ、3番目のより高い熟達度レベルを表す言語学的かつ機能に関する記述文が発表され、この3番目のレベルに関する研究はケンブリッジ英語検定のB2 Firstを考慮に入れて進められ、1999年に「Vantage」レベルが発表されました。(Van Ek and Trim 2001) その後、英語に特化したレベル記述文の研究が発展した結果、参照枠というコンセプトが現れ始め、もっと具体的な形になっていったのです。

概念的観点 CEFR – the conceptual perspective

1970-1990年代の参照枠(参照レベル枠組み)の出現は、学習者、教員、出版社らが「中級(intermediate)」や「上級(advanced)」として分類していた英語教授法(ELT)でおなじみの概念的なレベルに、一定の形を与えました。例えば、CEFRの著者の一人であるブライアン・ノース博士(Dr Brian North)は、伝統的なELTレベルのCEFRの起源を以下のように認めています：

“CEFRレベルはいきなり現れたわけではありません。故ピーター・ハーグリーヴス(Cambridge ESOL: 現ケンブリッジ大学英語検定機構)が、1991年のリュッシュリコン・シンポジウムにおいて、有益なカリキュラムや試験のレベルという意味で「自然なレベル」として述べたことが徐々に、認識の集大成として現れてきたのです。

このようなレベルを定義するプロセスは、非ネイティブにとって実践的な「達人」レベルを定義する、ケンブリッジ英語検定のC2 Proficiencyレベルの試験が実施された1913年から始まりました。CEFRのレベルでC2レベルに相当します。先の戦争の直前に、ケンブリッジはファースト・サーティフィケート(FCE)を導入しました。² FCEは英語を使って働くのに必要とされる「英語熟達者として最初「first」のレベル」として依然として広く認識されており、現在ではCEFRのB2レベルに関連付けられています。1970年代に欧州評議会は、社会で効果的に活動するのに移住者やビジターにはどのような種類の言語が必要とされるのかをもとに規定するために、Thresholdレベル(CEFRでB1レベル)と呼ばれる下位レベルを定義しました。Thresholdに次いでThresholdレベルに至るまでの半分にあたる到達点

¹ 上図のうち、ケンブリッジ英語検定(A2 Key, B1 Preliminary, B2 First, C1 Advanced, C2 Proficiency)、および中高生対象ケンブリッジ英語検定(A2 Key/ B1 Preliminary/ B2 First for Schools)を指す。

² 正確には1939年6月に導入されたLower Certificate in English (LCE)を指す。LCEはB2 Firstの前身であり、1975年に現在のFirst Certificate (FCE、現在のB2 First)へと名称が改められた。

を「足場」と考える Waystage レベル (CEFR で A2 レベル) がすぐに設定されたのです。これらのコンセプトが全て初めて「欧州評議会レベル」が示す可能なセットとして述べられたのは、デビッド・ウィルキンス (“*The Functional Approach*”の著者) による 1977 年ルートヴィヒヘイヴン (Ludwigshaven) シンポジウムでのプレゼンテーションでした。(North 2006:8)

1991 年に導入されたケンブリッジ英語検定の上級レベルの C1 Advanced 試験は、B2 First と C2 Proficiency の間のギャップを埋めるのに一役買い、CEFR で C1 レベルと提案されました。最後に、下位の Breakthrough レベルですが、A1 レベルとされました。このように、以上 6 つのレベル (A1-C2) は「ランゲージ・ラダー (言語の梯子段)」を構成し、言語熟達への経路を示したことで、言語教授と学習においてどのように学習成果を評価し、認定すればよいか明瞭になりました。ケンブリッジ英語検定試験 (A2 Key, B1 Preliminary, B2 First, C1 Advanced, C2 Proficiency) では、熟達への経路という考え方がすでに定着しており、現在の学習が次のレベルへの足掛かりとなることは広く認識されています。このように、ケンブリッジ英語検定が CEFR と密接な関係であると主張できる唯一の試験であることがお分かり頂けることでしょう。

共通参照枠の出現は「共通参照枠プロジェクト」を通じて正式に認められました。欧州評議会によって 1993-96 年に実施されたプロジェクトで、ユーロセンターの機関³から収集した重要なデータを活用して運営され、全般的な目標は欧州という文脈の中で、言語の学習、教授、評価 (試験) の目的を定義する上で、さまざまなユーザーを支援するために、透明性および一貫性のある共通の参照枠を作ることでした。

言語学習の進捗と結びついた枠組みの開発は、全く目新しい概念ではありません。欧州では、ALTE⁴のメンバーらが組織的に1990年初頭までに取り組み、異なる欧州言語および熟達レベルに渡る自らの資格試験を、ヨーロッパ共通参照枠内に配置しました。熟達度に関して共通レベルを定める枠組みの開発目的は、欧州内で国境を超えた資格証明書の認定を促進することでした。ケンブリッジ大学英語検定機構とALTEのメンバーは、その整合性を検証するためにいくつかの調査を行いました。主に1998-2000年の『ALTE Can Do プロジェクト』を通じて行われました。2001年に刊行されたCEFRに関する出版物に続いて、ALTEメンバー機関は、6つのCEFRレベル(A1-C2)を導入しました。

実証的観点 CEFR – the empirical perspective

CEFR を経験的に立証し (North and Schneider 1998, North 2000a) 、それを評価 (アセスメント) にリンクさせようとする試み (North 2006b) が為されるにつれ、測定理論 (Measurement theory) がますます重要になりました。

弊機関をはじめ、世界中の言語テスト提供機関が、透明性と一貫性を理由に、各自の試験を CEFR に照らして配置しようとしています。しかしながら、どのように配置するかについては、どの主張についても慎重に精査される必要があり、ある試験がある CEFR のレベルに当たると単に主張したとしても、必ずしもそうなるとは限らないのです。CEFR に照らして経験的に配置するには、適切な証拠を収集して評価する等の厳密な分析アプローチが必要になります。

『ALTE Can Do プロジェクト』 (Jones 2001, 2002) は、ケンブリッジが自ら開発した英語検定の5つのレベルが、CEFRの6つのレベル上どこに置かれるかを導き出すために使われた経験的アプローチの一つです。また、その他の経験的サポートに、ケンブリッジのアイテムバンキング法がありますが、あらゆるテストを開発、検証する際の弊機関のアプローチを支えています (Weir and Milanovic 2003)。1987-90年の「ケンブリッジ-TOEFL比較可能性研究」により、弊機関の経験的要件が確立され、テストの信頼性やバージョンの同等性とい

³ <http://www.eurocentres.com/en/eurocentres-60-years-competence-and-innovation>

⁴ Association of Language Testers in Europe: ヨーロッパ言語テスト協会。欧州域内の言語テスト開発機関の集合体。
<http://www.alte.org/>

った測定に関する課題を解決するためのアプローチやシステムに大いに投資しました(Bachman et al 1995)。潜在特性理論による手法(Latent trait methods)が、さまざまなケンブリッジのレベルを共通の測定尺度にマッピングするために、さまざまな定量的アプローチ(例: 定性的研究方法と並行して、項目応答理論、ラッシュモデルに基づく手法)を用いて1990年代初めより使われてきました。もっと最近では、弊機関は欧州評議会の、言語テストをCEFRに関連付けるためのマニュアル”Manual Relating Language Examinations to the CEFR”を著わし、トライアル実施の支援を行いました(Figueras et al 2005)。マニュアルでは、次の3つの手続きをベースに、言語テストをCEFRに関連付ける過程が紹介されています。

テスト内容・目的についてスペック確認 Specification of the content and purpose of an examination

ケンブリッジ英語検定のB1 PreliminaryとA2 Keyのテスト仕様書が、もともと「Threshold」と「Waystage」レベルをそれぞれベースにして作成された際、同様の手続きがとられました。ケンブリッジ英語検定に関するさまざまな文書(テスト仕様書、試験作問者用ガイドライン、面接官トレーニング教材、試験ハンドブック等)は、CEFRを直接参照しているので、既存・新規テストともにテストの内容および目的が、CEFRとどのような整合性があるのか評価を行うにあたり役立ちます。

CEFRレベルの判断の基準化 Standardisation of interpretation of CEFR levels

ケンブリッジの主導で、他機関が自身のテストをCEFRレベルに従って評価するお手伝いをしています。各CEFRのレベル毎に、メイン・スイート試験のライティングの試験官用研修パック、スピーキング試験官用の研修教材から、スピーキングおよびライティングのテスト・パフォーマンスのサンプルの提供まで、また、リーディングおよびリスニングテストのアイテムバンクからCEFRレベルが付されたテスト項目やタスクを提供することにより、関連マテリアルの開発を支援してきました。

経験的妥当性検証の研究 Empirical validation studies

経験的妥当性検証⁵の研究には専門家の知識とリソースが必要です。弊機関にとってはお馴染みのアイテムバンキングやテスト・キャリブレーション手法 (test calibration methodology)⁶を部分的に介して、また、「ライティングのための共通尺度プロジェクト」(Hawkey and Barker 2004)といった有益な研究、ケース・スタディを通じて、ケンブリッジ大学英語検定機構はこの種の研究を請け負うことができる数少ない試験開発機関であると自負しています。

進化的観点

CEFR は未完成のままであり、さまざまな方法やコンテキストで活用されながら進化し続けています。CEFRの参照枠、そして実践的なガイダンスにより多くの人々が恩恵に与っているかもしれません。しかしながらCEFRの著者たちが強調しているのは、多様性を尊重し、奨励する手段としての、枠組み本来の意図であり、CEFRが「どのようにすればよいか」という方法を記した文書ではないことを私たちに思い出させてくれます。ある特定のコンテキストで重要となるならば、思慮深くかつ理性的に解釈されなくてはなりません。

⁵ 経験的妥当化は、対象としている試験自体の妥当性や試験の CEFR への対応づけの妥当性がどちらも論理的に正しい(sound)結果になっていることに根拠(evidence)を与える過程で、実際にテストを実施して得られたデータや査定の評定結果を収集し分析した結果を検討する。出所:「テストの基礎理論」(野口、大隅, 2014)

⁶ ラッシュ分析と呼ばれる手法。テスト問題の難度を測定するために使われる統計的手法。テストは、全て同じ難度レベルに「目盛り付けされた」(='calibrated') アイテム(問題)が集められている。

また、CEFRによってアセスメント(評価)の質保証への取組みが活性化されました。1990年初めにALTEの専門的な実務指針が発行されたのを発端として、質に関する課題の解決が、私どもにとって長年の公約となっています。ALTEの実務指針は、品質管理システムの開発(例:ALTEのウェブページにある[Principles of Good Practice](#)をご覧ください)を通じて言語テストの質保証の概念に詳述されています。

2001年以来、CEFRは他の新たな取組みにとってインスピレーションの源となっています。英語に特化したCEFRを開発する革新的な『イングリッシュ・プロフィール・プログラム』が、その一つです。英語用の参照レベル記述の包括的なセットを作成する資料、つまり、どのように学習者がCEFRの各レベルで英語を使うと予想されるのか、という実践的な記述文の発表が徐々に増えてきました。『イングリッシュ・プロフィール・プログラム』は、協調的かつ学際的な研究プログラムであり、CEFRを発展させたものです。ケンブリッジ大学英語検定機構は創設メンバーであり、カリキュラム、ワードリスト(用語集)、コース教材、指導者用ガイドを開発するためのリソースの作成に極めて重要な役割を果たしています。また、学習者、教員、そして言語学習に関わるあらゆる専門家が実践的に使える教材をお届けしています。(詳しくは、『イングリッシュ・プロフィール・プログラム』のウェブページwww.EnglishProfile.orgを参照ください)

結論 Conclusion

今日では、ケンブリッジ英語検定とCEFRはどちらも世界の言語・教育政策において重要な役割を果たしています。CEFRは、結果として生じる言語学習、教授法、評価法への影響によって、言語の熟達レベルを定義するのに役立っています。ケンブリッジ大学英語検定機構は、CEFRの開発に引き続き言語評価専門機関として深く貢献して行く所存です。ちなみに弊機関が網羅する試験の範囲は言語試験としては最大を誇り、教授資格認定試験、試験対策の参考教材含め、すべてCEFRに関連しています。

ケンブリッジ英語検定がCEFRを具現化しているという主張は議論され得るかもしれませんが、ますます多くの研究によって(ケンブリッジ英語検定が)CEFRを重要な特徴として取り入れ表現している、また、CEFRを構造の一部として含んでいる、そしてCEFRをさまざまな方法で表現し、象徴しているといった主張が、裏付けされています。ケンブリッジ英語検定がCEFRを具現化しているという考えは、私どもの歴史的なつながり、概念上のシナジー、そして経験的基盤を勘案すれば、当然の帰結であるといえるでしょう。

CEFRとケンブリッジ英語検定の関係は、CEFRのレベルやアプローチを具現化し続ける既存のケンブリッジ英語検定の改訂や新しい語学試験の開発を通して、今後も進化し続けるでしょう。両者の高品質な関係は、言語学習を繁栄させ、達成し認知されるよう推し進めることがどの程度できるのか、そしてその結果、世界中の人々や社会全体の生活をどの程度豊かなものにできるのかそれによりおそらく最良の判断が下されることでしょう。

参考文献 References

Bachman, L F, Davidson, F, Ryan, K and Choi, I C (1995) An investigation into the comparability of two tests of English as a foreign language: The Cambridge-TOEFL comparability study, Cambridge: UCLES/Cambridge University Press.

Council of Europe (2001) Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment, Cambridge: Cambridge University Press.

Figueras, N, North, B, Takala, S, Verhelst, N and Van Avermaet, P (2005) Relating Examinations to the Common European Framework: a Manual, *Language Testing* 22 (3), 1–19.

Hawkey, R & Barker, F (2004) Developing a common scale for the assessment of writing, *Assessing Writing* 9/2, 122–159.

Jones, N (2001) The ALTE Can Do Project and the role of measurement in constructing a proficiency framework, *Research Notes* 5, 5–8.

—(2002) Relating the ALTE Framework to the Common European Framework of Reference, in Council of Europe, *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment. Case Studies*, Strasbourg: Council of Europe Publishing, 167–183.

North, B (1995) The development of a common framework scale of descriptors of language proficiency based on a theory of measurement, *System* 23, 445–465.

—(2000a) The development of a common framework scale of language proficiency, New York: Peter Lang.

—(2000b) Linking Language Assessments: an example in a low-stakes context, *System* 28, 555–577.

—(2006) The Common European Framework of Reference: Development, Theoretical and Practical Issues, paper presented at the symposium ‘A New Direction in Foreign Language Education: The Potential of the Common European Framework of Reference for Languages’, Osaka University of Foreign Studies, Japan, March 2006.

North, B and Schneider, G (1998) Scaling Descriptors for Language Proficiency Scales, *Language Testing* 15 (2), 217–262.

Taylor, L (2004) Issues of test comparability, *Research Notes* 15, 2–5.

Taylor, L and Jones, N (2006) [Cambridge ESOL exams and the Common European Framework of Reference for Languages \(CEFR\)](#), *Research Notes* 24, 2-5.

Van Ek, J A and Trim, J L M (1998a) *Threshold 1990*, Cambridge: Cambridge University Press.

—(1998b) *Waystage 1990*, Cambridge: Cambridge University Press.

—(2001) *Vantage*, Cambridge: Cambridge University Press.

Weir, C J and Milanovic, M (2003) Continuity and Innovation: Revising the Cambridge Proficiency in English examination 1913–2002, *Studies in Language Testing* Vol. 15, Cambridge: UCLES/Cambridge University Press.

野口裕之、大隅敦子(2014)「テストニングの基礎理論」164-165

(ケンブリッジ大学英語検定機構 日本統括オフィスによる翻訳時、参考文献として活用)